

第六章 外遊び体験、通学行動と危険性認識、好きな場所の認識との関係

6-1 外遊び体験の類型化

6-1-1 危ない道撮影サンプルを対象とした外遊び体験の類型化

危ない道撮影サンプルで外遊び体験の分析が可能なサンプル 110 人を対象としてクラスター分析を行い、表 6-1 のように外遊び体験の類型化を行った。方法は「3-4-4 クラスター分析による外遊び体験の類型化」に述べた通り。

表 6-1 外遊び体験の類型化(危ない道撮影サンプル)

	サンプル数	現遊び頻度傾向	現遊び場所数平均値	過去遊び頻度傾向	過去遊び場所数平均	遊び場タイプ傾向	小・中の区別傾向
グループ①	36	普通	2.53	現在より豊富	3.92	なし	なし
グループ②	28	豊富	2.32	現在と変わらない	2.25	屋外遊び	小学生
グループ③	5	豊富	7.20	現在と変わらない	5.80	なし	なし
グループ④	41	貧困	1.24	現在より豊富	1.49	屋内遊び	なし

表 6-1 より、グループ①は現遊び場所数平均値と過去遊び場所数平均値が高く、遊び頻度もやや豊富だったため、『場体験豊富型』と名付けた。グループ④は現遊び場所数平均値と過去遊び場所数平均値が低く、遊び頻度も貧困だったため、『場体験貧困型』と名付けた。グループ③についてはサンプル数が少なかったため、類似するグループ①に含めた。グループ②は、グループ①にもグループ④にも含まれず、中間的なグループであったため、『平均型』と名付けた。

なお、場体験とは主に様々な場所で遊ぶ体験のことである。

各グループの名称とサンプル数は表 6-2 の通り。

表 6-2 外遊び体験の各グループの名称(危ない道撮影サンプル)

グループ番号	名称	サンプル数	割合
①+③	場体験豊富型	41	37.3%
②	平均型	28	25.5%
④	場体験貧困型	41	37.3%
	計	110	100.0%

このように、危ない道撮影サンプルは、外遊び体験に関して、場体験豊富型、平均型、場体験貧困型の三つのタイプに分けられた。

6-1-2 好きな道撮影サンプルを対象とした外遊び体験の類型化

好きな道撮影サンプルで外遊び体験の分析が可能なサンプル61人を対象としてクラスター分析を行い、表6-3のように外遊び体験の類型化を行った。方法は「3-4-5 クラスター分析による外遊び体験の類型化」に述べた通り。

表 6-3 外遊び体験の類型化(好きな道撮影サンプル)

	サンプル数	現遊び頻度傾向	現遊び場所数平均値	過去遊び頻度傾向	過去遊び場所数平均	遊び場タイプ傾向	小・中の区別傾向
グループ①	27	貧困	1.78	現在より豊富	1.85	屋内遊び	なし
グループ②	20	豊富	2.35	現在と変わらない	2.45	屋外遊び	小学生
グループ③	14	普通	4.43	現在より豊富	5.43	屋外遊び	なし

表6-3より、グループ①は現遊び場所数平均値と過去遊び場所数平均値が低く、遊び頻度もやや貧困だったため、場体験貧困型と名付けた。グループ③は現遊び場所数平均値と過去遊び場所数平均値が高く、遊び頻度もやや豊富だったため、場体験豊富型と名付けた。グループ②は、グループ①にもグループ③にも含まれず、中間的なグループであったため、『平均型』と名付けた。

各グループの名称及びサンプル数は表6-4の通り。

表 6-4 外遊び体験の各グループの名称(好きな道撮影サンプル)

グループ番号	名称	サンプル数	割合
①	場体験貧困型	27	44.3%
②	平均型	20	32.8%
③	場体験豊富型	14	23.0%
	計	61	100.0%

このように、好きな道撮影サンプルは、外遊び体験に関して、場体験貧困型、平均型、場体験豊富型の三つのタイプに分けられた。

6-2 外遊び体験、通学行動と撮影タイプとの関係

6-2-1 外遊び体験、通学行動と写真集約危ない道撮影タイプとの関係

写真集約危ない道撮影タイプと外遊び体験や通学行動の類型や分類を用いてクロス集計を行った。(1) 外遊び体験類型、(2) 学校別、(3) 男女別、(4) 通学距離分類、(5) 通学人数分類、(6) 通学手段分類 とそれぞれクロス集計し、同時にカイ自乗検定を行った。

(1) 外遊び体験類型

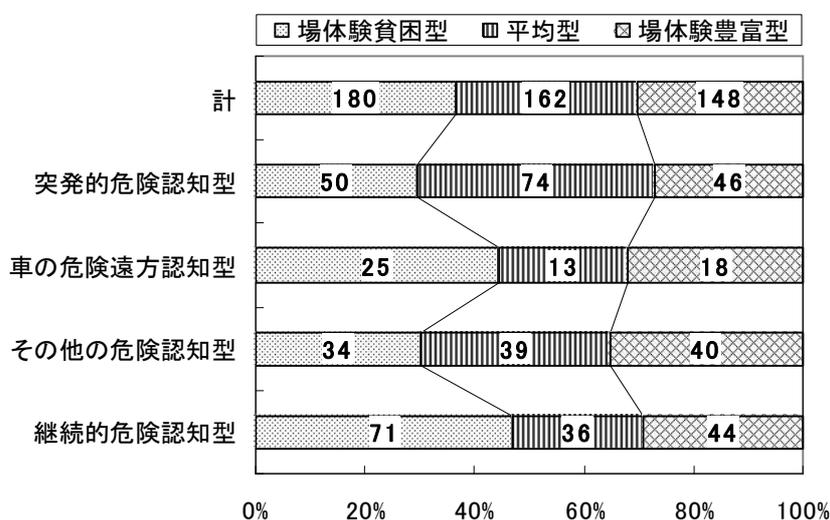


図 6-1 写真集約危ない道撮影タイプ×外遊び体験類型のクロス集計

表 6-5 写真集約危ない道撮影タイプ×外遊び体験類型のカイ自乗検定

	値	自由度	漸近有意確率 (両側)
Pearson のカイ2乗	22.07	6	0.12%

図 6-1 より、場体験貧困型は突発的危険認知型の割合が少なく、車の危険遠方認知型や継続的危険認知型の割合が多くなっていて、また、その他の危険認知型では特に外遊び体験との関連が認められなかった。

このことから、外遊びにおいて場体験が貧困な子どもは、突発的な危険を認知することが難しく、遠方からでも確認できる車の危険や継続的な危険を認知していることが多い。

また、その他の危険に関しては、外遊び体験とは関係なく認知されると言える。

なお、表 6-5 より漸近有意確率が 0.12%であるため、有意水準 1%のとき統計的に有意である。

(2) 学校別

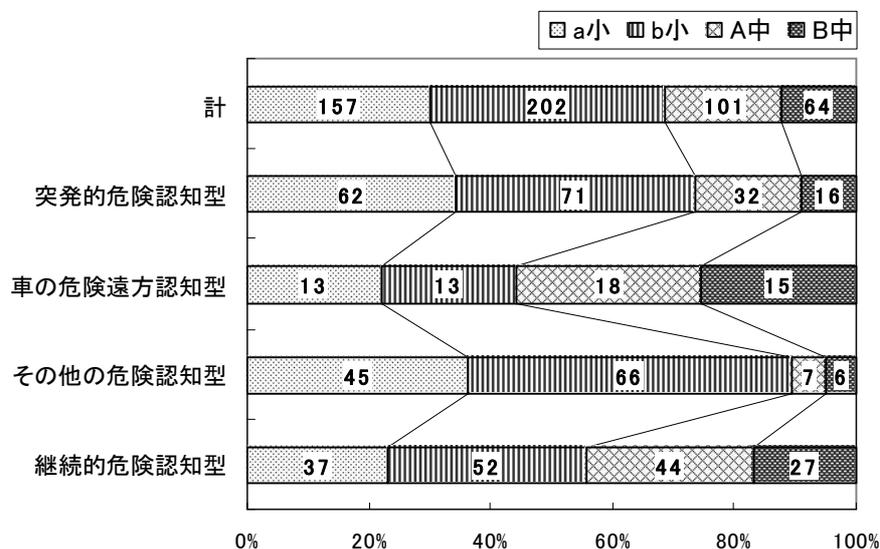


図 6-2 写真集約危ない道撮影タイプ×学校別のクロス集計

表 6-6 写真集約危ない道撮影タイプ×学校別のカイ自乗検定

	値	自由度	漸近有意確率 (両側)
Pearson のカイ2乗	59.30	9	0.00%

図 6-2 より、突発的危険認知型とその他の危険認知型において中学校の割合が少なくなっている。また、その他の危険認知型において b 小の割合が多くなっている。

このことから、中学生は突発的危険やその他の危険はあまり認知していないと言える。ただし、その他の危険に関しては、心身の成長に応じて、小学生の時に感じていた危険、つまり転落や転倒の危険などを感じなくなったと考えられる。また、b 小のような市街地の小学校では、その他の危険を多く認知している子どもが多いと言える。

なお、表 6-6 より漸近有意確率が 0.01%以下であるため、有意水準 1%のとき統計的に有意である。

(3) 男女別

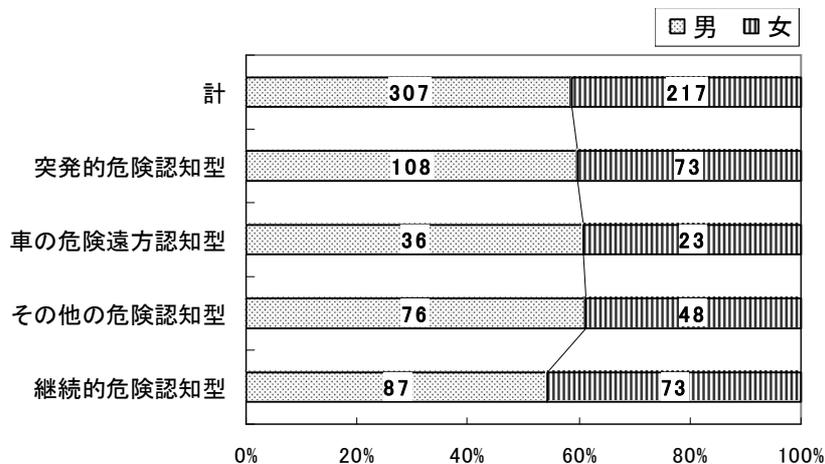


図 6-3 写真集約危ない道撮影タイプ×男女別のクロス集計

表 6-7 写真集約危ない道撮影タイプ×男女別のカイ自乗検定

	値	自由度	漸近有意確率 (両側)
Pearson のカイ2乗	1.77	3	62.06%

図 6-3 より、特徴的な傾向は見られなかった。

このことから、性差による違いは危険性認識に影響しないと言える。

なお、表 6-7 より漸近有意確率が 62.06%であるため、有意水準 5%のとき統計的に有意であるとは言えない。

(4) 通学距離分類

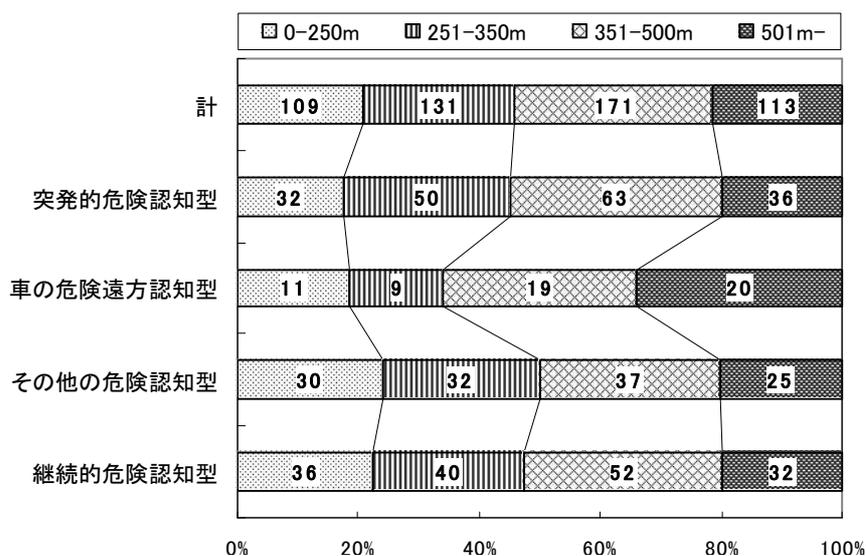


図 6-4 写真集約危ない道撮影タイプ×通学距離分類のクロス集計

表 6-8 写真集約危ない道撮影タイプ×通学距離分類のカイ自乗検定

	値	自由度	漸近有意確率 (両側)
Pearson のカイ2乗	9.92	9	35.74%

図 6-4 より、車の危険遠方認知型において通学距離が 501m-の割合が高くなっている。

このことから、通学距離が長い子どもは車の危険を遠方から認知していると言える。

なお、表 6-8 より漸近有意確率が 35.74%であるため、有意水準 5%のとき統計的に有意であるとは言えない。

(5) 通学人数分類

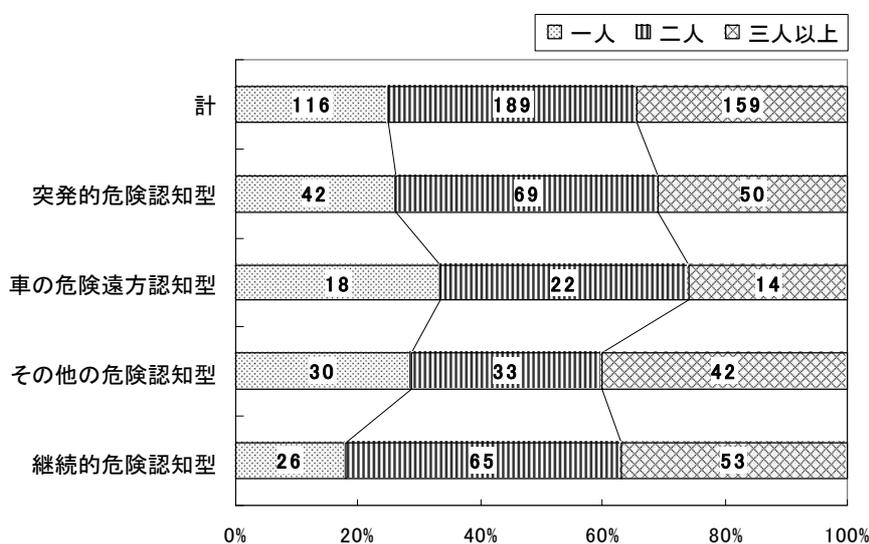


図 6-5 写真集約危ない道撮影タイプ×通学人数分類のクロス集計

表 6-9 写真集約危ない道撮影タイプ×通学人数分類のカイ自乗検定

	値	自由度	漸近有意確率 (両側)
Pearson のカイ2乗	10.84	6	9.33%

図 6-5 より、継続的認知型は、通学人数が一人の割合が少なく、三人以上の割合が多い。また、車の危険遠方認知型は、通学人数が一人の割合が多く、三人以上の割合が少ない。その他の危険型は通学人数が三人以上の割合が多い。

このことから、通学人数が多くなると継続的危険を認知するようになり、車の危険を遠方で認知することが少なくなると言える。また、通学人数が多いとその他の危険を認知しており、多様な視点を持つことができる言える。

なお、表 6-9 より漸近有意確率が 9.33%であるため、有意水準 5%のとき統計的に有意であるとは言えない。

(6) 通学手段分類(中学生のサンプルのみ)

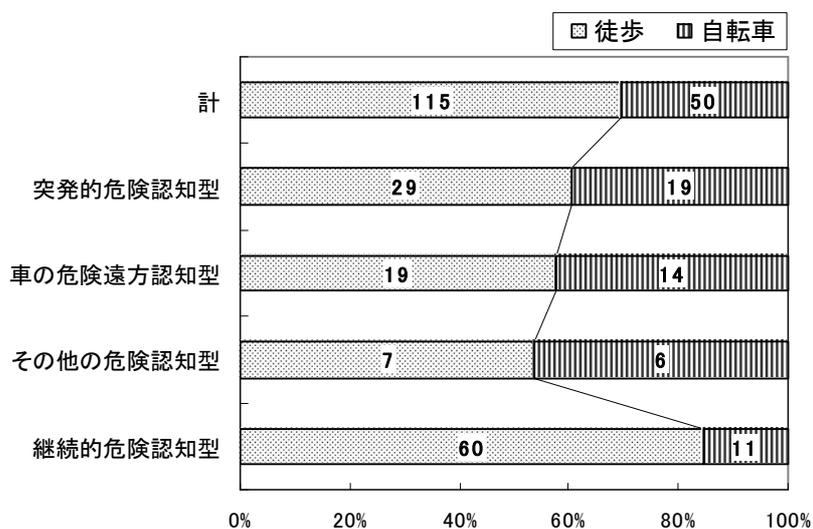


図 6-6 写真集約危ない道撮影タイプ×通学手段分類のクロス集計

表 6-10 写真集約危ない道撮影タイプ×通学手段分類のカイ自乗検定

	値	自由度	漸近有意確率 (両側)
Pearson のカイ2乗	13.17	3	0.43%

図 6-6 より、徒歩であると継続的危険認知型の割合が多くなっている。また、自転車であるとその他の危険型や車の危険遠方認知型の割合が多くなる。

このことから、徒歩通学をする中学生は継続的な危険を認知している。また、自転車通学する中学生は車の危険を遠方で認知したり、その他の危険を認知したりすると言える。

なお、表 6-10 より漸近有意確率が 0.43%であるため、有意水準 1%のとき統計的に有意である。

6-2-2 外遊び体験、通学行動と危ない道撮影タイプとの関係

危ない道撮影タイプと外遊び体験や通学行動の類型や分類を用いてクロス集計を行った。(1) 外遊び体験類型、(2) 学校別、(3) 男女別、(4) 通学距離分類、(5) 通学人数分類、(6) 通学手段分類 とそれぞれクロス集計し、同時にカイ自乗検定を行った。

(1) 外遊び体験類型

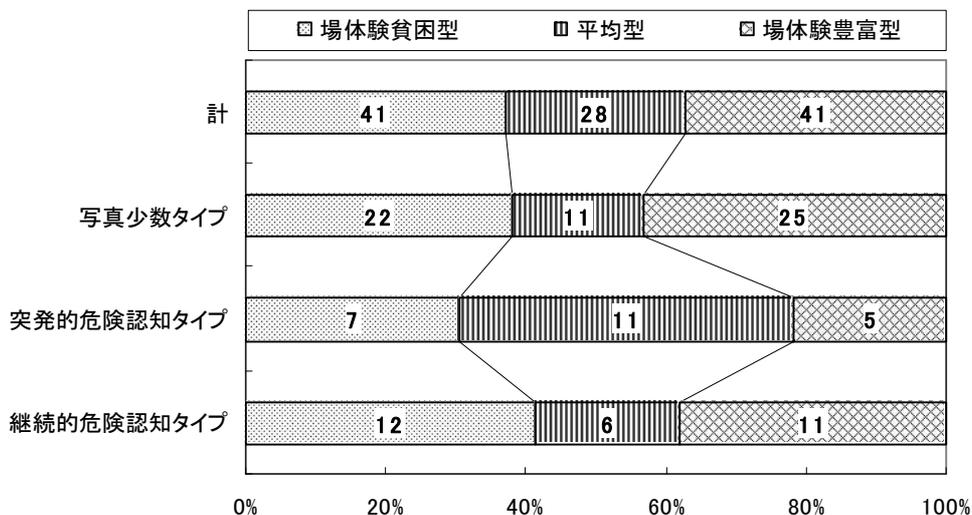


図 6-7 危ない道撮影タイプ×外遊び体験類型のクロス集計

表 6-11 危ない道撮影タイプ×外遊び体験類型のカイ自乗検定

	値	自由度	漸近有意確率 (両側)
Pearson のカイ2乗	8.19	4	8.49%

図 6-7 より、突発的危険認知タイプにおいて場体験豊富型の割合が少なく、写真少数タイプにおいて場体験豊富型の割合が多くなっている。

このことから、場体験が豊富な子どもは突発的な危険を認知することは少なく、危険箇所をたくさん探すことは難しいと言える。

なお、表 6-11 より漸近有意確率が 8.49%であるため、有意水準 5%のとき統計的に有意であるとは言えない。

(2) 学校別

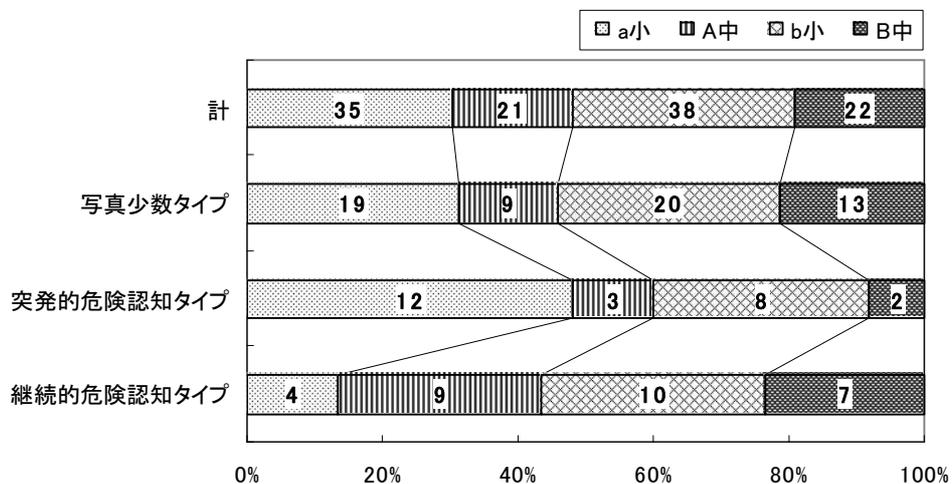


図 6-8 危ない道撮影タイプ×学校別のクロス集計

表 6-12 危ない道撮影タイプ×学校別のカイ自乗検定

	値	自由度	漸近有意確率 (両側)
Pearson のカイ2乗	10.78	6	9.54%

図 6-8 より、突発的危険認知タイプにおいて a 小の割合が多くなっている。また、継続的危険認知タイプにおいて中学校の割合が多くなっている。

このことから、a 小のような郊外の小学校においては突発的な危険を認知することが多いと言える。また、中学生は継続的な危険を認知することが多いと言える。

なお、表 6-12 より漸近有意確率が 9.54%であるため、有意水準 5%のとき統計的に有意であるとは言えない。

(3) 男女別

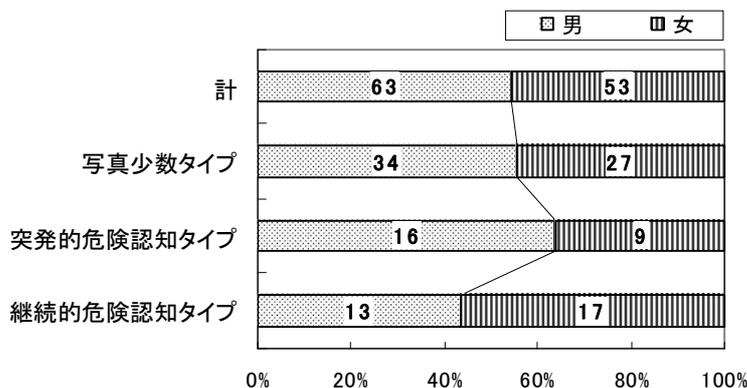


図 6-9 危ない道撮影タイプ×男女別のクロス集計

表 6-13 危ない道撮影タイプ×男女別のカイ自乗検定

	値	自由度	漸近有意確率 (両側)
Pearson のカイ2乗	2.45	2	29.34%

図 6-9 より、継続的危険認知タイプにおいて女性の割合が多くなっており、突発的危険認知タイプにおいては男性の割合が多くなっている。

このことから、女性は継続的な危険を認知することが多く、男性は突発的な危険を認知することが多いと言える。

なお、表 6-13 より漸近有意確率が 29.34%であるため、有意水準 5%のとき統計的に有意であるとは言えない。

(4) 通学距離分類

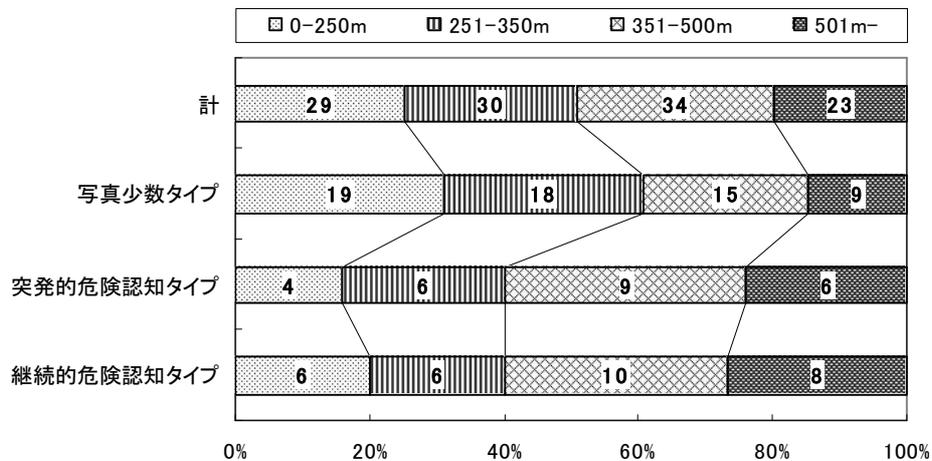


図 6-10 危ない道撮影タイプ×通学距離分類のクロス集計

表 6-14 危ない道撮影タイプ×通学距離分類のカイ自乗検定

	値	自由度	漸近有意確率 (両側)
Pearson のカイ2乗	5.51	6	48.05%

図 6-10 より、写真少数タイプにおいて通学距離が短いサンプルの割合が多い。

このことから、通学距離が短いと写真枚数が少なくなると言える。

なお、表 6-14 より漸近有意確率が 48.05%であるため、有意水準 5%のとき統計的に有意であるとは言えない。

(5) 通学人数分類

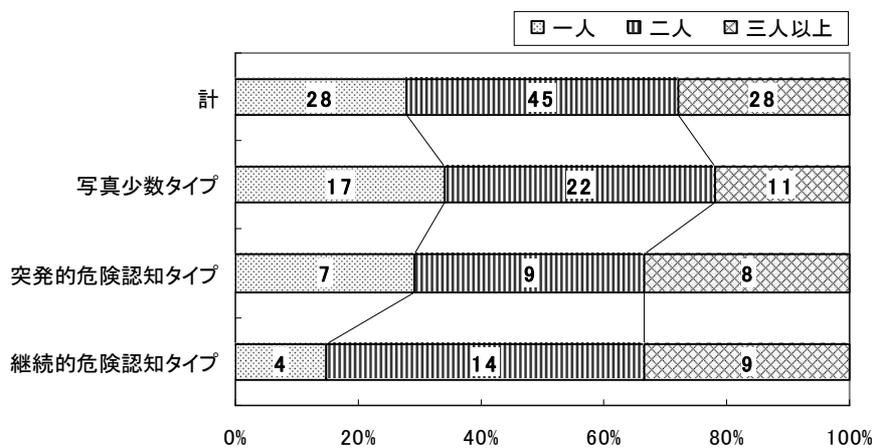


図 6-11 危ない道撮影タイプ×通学人数分類のクロス集計

表 6-15 危ない道撮影タイプ×通学人数分類のカイ自乗検定

	値	自由度	漸近有意確率 (両側)
Pearson のカイ2乗	4.12	4	39.06%

図 6-11 より、写真少数タイプにおいて通学人数が少ないサンプルの割合が多い。また、継続的危険認知タイプにおいて通学人数が多いサンプルの割合が多い。

このことから、通学人数が少ないと写真枚数が少なくなり、通学人数が多いと継続的な危険を認知することが多いと言える。

なお、表 6-15 より漸近有意確率が 39.06%であるため、有意水準 5%のとき統計的に有意であるとは言えない。

(6) 通学手段分類(中学校のサンプルのみ)

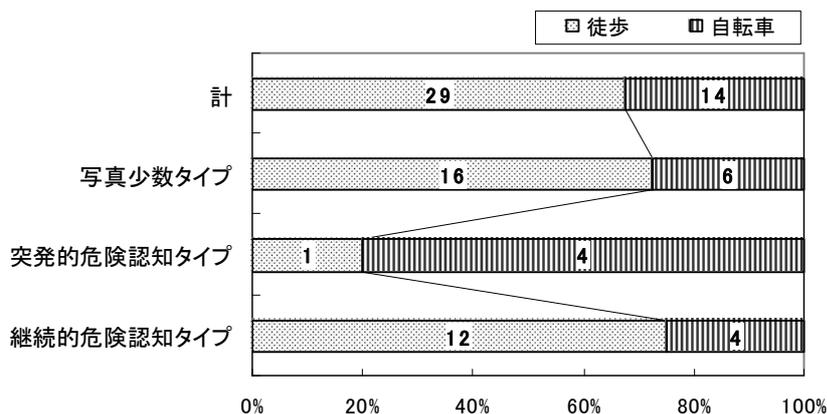


図 6-12 危ない道撮影タイプ×通学手段分類のクロス集計

表 6-16 危ない道撮影タイプ×通学手段分類のカイ自乗検定

	値	自由度	漸近有意確率 (両側)
Pearson のカイ2乗	5.82	2	5.44%

図 6-12 より、突発的危険認知タイプにおいて自転車の割合が多くなっている。

このことから、自転車で通学する中学生は突発的な危険を認知することが多いと言える。

なお、表 6-16 より漸近有意確率が 5.44%であるため、有意水準 5%のとき統計的に有意であるとは言えない。

6-2-3 外遊び体験、通学行動と写真集約好きな道撮影タイプとの関係

写真集約好きな道撮影タイプと外遊び体験や通学行動の類型や分類を用いてクロス集計を行った。(1) 外遊び体験類型、(2) 学校別、(3) 男女別、(4) 通学距離分類、(5) 通学人数分類、(6) 通学手段分類 とそれぞれクロス集計し、同時にカイ自乗検定を行った。

(1) 外遊び体験類型

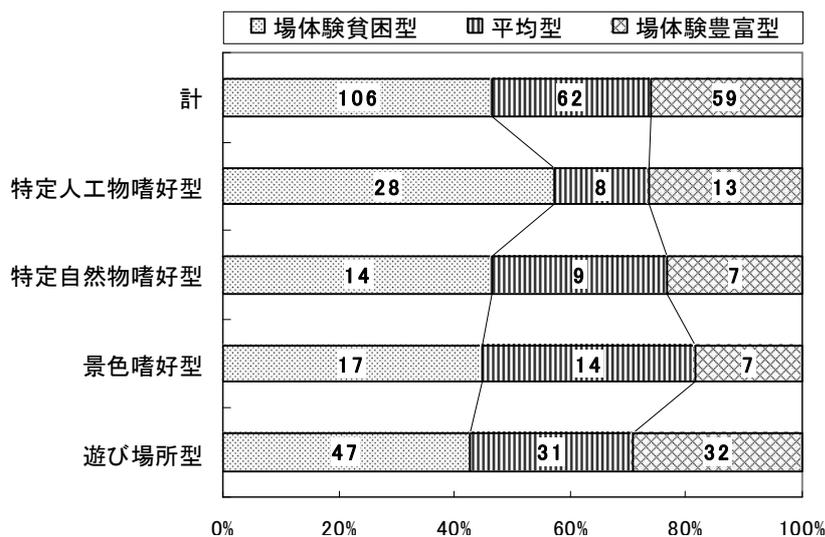


図 6-13 写真集約好きな道撮影タイプ×外遊び体験類型のクロス集計

表 6-17 写真集約好きな道撮影タイプ×外遊び体験類型のカイ自乗検定

	値	自由度	漸近有意確率 (両側)
Pearson のカイ乗	6.42	6	37.81%

図 6-13 より、特定人工物嗜好型において場体験貧困型の割合が多くなっている。また、遊び場所型において場体験豊富型の割合が多くなっている。

このことから、外遊びにおいて場体験が貧困な子どもは特定の人工物に魅力を感じていることが多い。また、場体験が豊富な子どもは遊び場所に魅力を感じていることが多い。

なお、表 6-17 より漸近有意確率が 37.81%であるため、有意水準 5%のとき統計的に有意であるとは言えない。

(2) 学校別

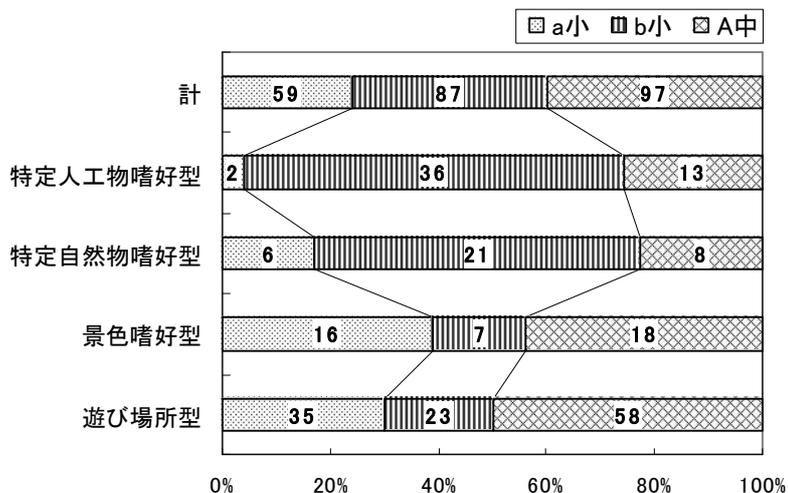


図 6-14 写真集約好きな道撮影タイプ×学校別のクロス集計

表 6-18 写真集約好きな道撮影タイプ×学校別のカイ自乗検定

	値	自由度	漸近有意確率 (両側)
Pearson のカイ2乗	58.35	6	0.00%

図 6-14 より、特定人工物嗜好型と特定自然物嗜好型において b 小の割合が多くなっており、特定人工物嗜好型では a 小の割合が少なくなっている。また、遊び場所型と景色嗜好型において a 小と A 中の割合が多くなっている。

このことから、b 小のような市街地の小学校では特定の物に対して魅力を感じており、a 小のような郊外の小学校では景色や遊び場所に魅力を感じる人が多い。また、A 中のような城下町の特徴を残す町並みでは遊び場所や景色に魅力を感じる人が多い。

なお、表 6-18 より漸近有意確率が 0.01%以下であるため、有意水準 1%のとき統計的に有意である。

(3) 男女別

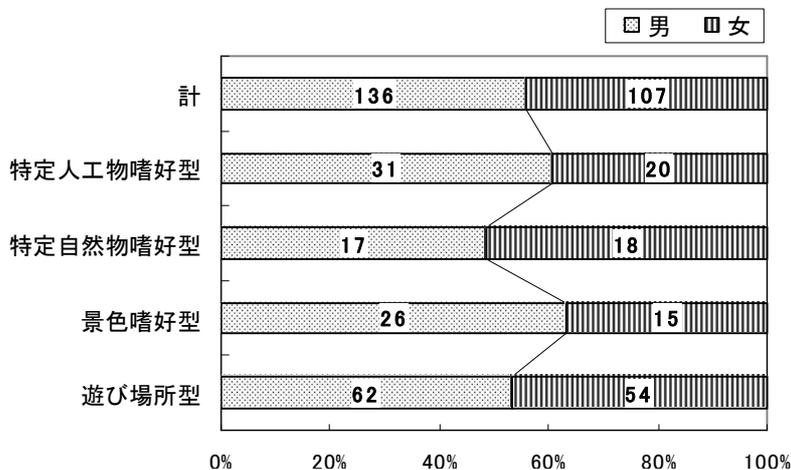


図 6-15 写真集約好きな道撮影タイプ×男女別のクロス集計

表 6-19 写真集約好きな道撮影タイプ×男女別のカイ自乗検定

	値	自由度	漸近有意確率 (両側)
Pearson のカイ2乗	2.48	3	47.92%

図 6-15 より、特定自然物嗜好型において女性の割合が高く、景色嗜好型で男性の割合が高くなっている。

このことから、女性は特定の自然物に魅力を感じる事が多く、男性は景色に魅力を感じる事が多いと言える。

なお、表 6-19 より漸近有意確率が 47.92%であるため、有意水準 5%のとき統計的に有意であるとは言えない。

(4) 通学距離分類

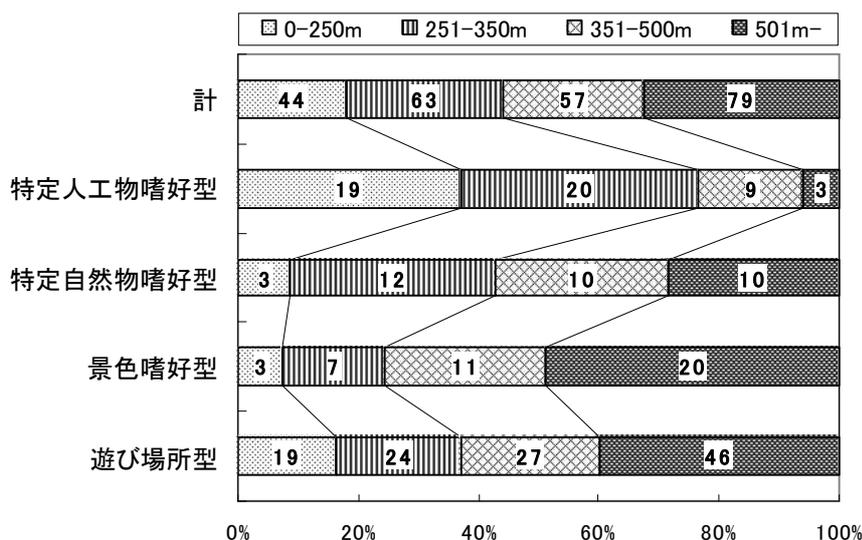


図 6-16 写真集約好きな道撮影タイプ×通学距離分類のクロス集計

表 6-20 写真集約好きな道撮影タイプ×通学距離分類のカイ自乗検定

	値	自由度	漸近有意確率 (両側)
Pearson のカイ2乗	39.57	9	0.00%

図 6-16 より、特定人工物嗜好型において通学距離の短いサンプルの割合が多くなっている。また、景色嗜好型において通学距離の長いサンプルの割合が多くなっている。

このことから、通学距離が短いと特定の人工物に魅力を感じる事が多く、通学距離が長いと景色に魅力を感じる事が多いと言える。

なお、表 6-20 より漸近有意確率が 0.01%以下であるため、有意水準 1%のとき統計的に有意である。

(5) 通学人数分類

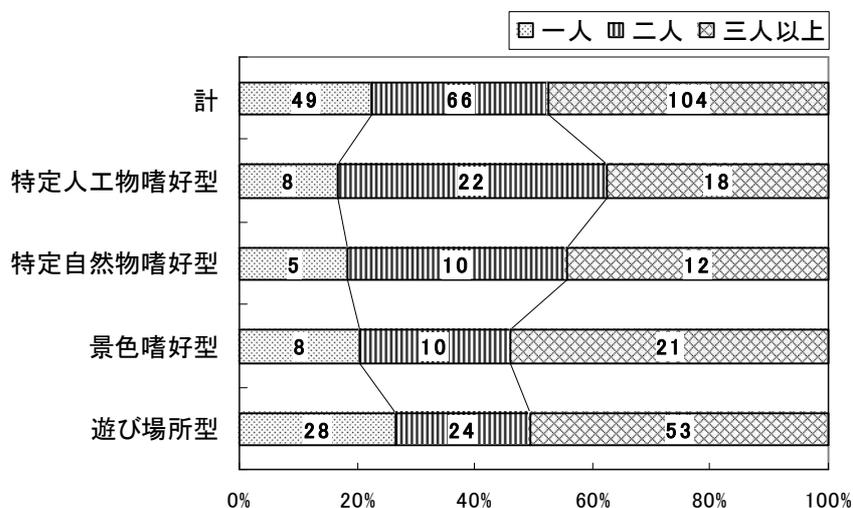


図 6-17 写真集約好きな道撮影タイプ×通学人数分類のクロス集計

表 6-21 写真集約好きな道撮影タイプ×通学人数分類のカイ自乗検定

	値	自由度	漸近有意確率 (両側)
Pearson のカイ2乗	9.85	6	13.10%

図 6-17 より、遊び場所型において通学人数が一人の割合が多くなっている。また、景色嗜好型において通学人数が三人以上の割合が多くなっている。

このことから、通学人数が少ないと遊び場所に魅力を感じるが多くなり、通学人数が多いと景色に魅力を感じるが多くなる。

なお、表 6-21 より漸近有意確率が 13.10%であるため、有意水準 5%のとき統計的に有意であるとは言えない。

(6) 通学手段分類

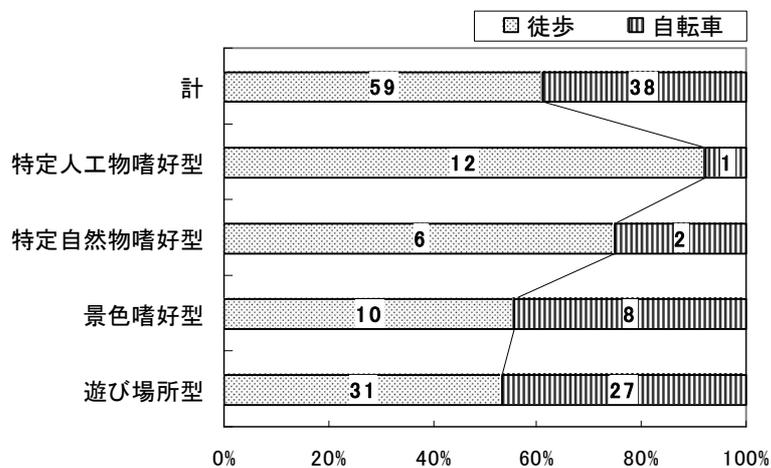


図 6-18 写真集約好きな道撮影タイプ×通学手段分類のクロス集計

表 6-22 写真集約好きな道撮影タイプ×通学手段分類のカイ自乗検定

	値	自由度	漸近有意確率 (両側)
Pearson のカイ2乗	7.62	3	5.46%

図 6-18 より、特定人工物嗜好型と特定自然物嗜好型において自転車の割合が少ない。
このことから、自転車通学の子どもは特定の人工物や自然物に目が向かないと言える。
なお、表 6-22 より漸近有意確率が 5.46%であるため、有意水準 5%のとき統計的に有意であるとは言えない。

6-2-4 外遊び体験、通学行動と好きな道撮影タイプとの関係

好きな道撮影タイプと外遊び体験や通学行動の類型や分類を用いてクロス集計を行った。(1) 外遊び体験類型、(2) 学校別、(3) 男女別、(4) 通学距離分類、(5) 通学人数分類、(6) 通学手段分類 とそれぞれクロス集計し、同時にカイ自乗検定を行った。

(1) 外遊び体験類型

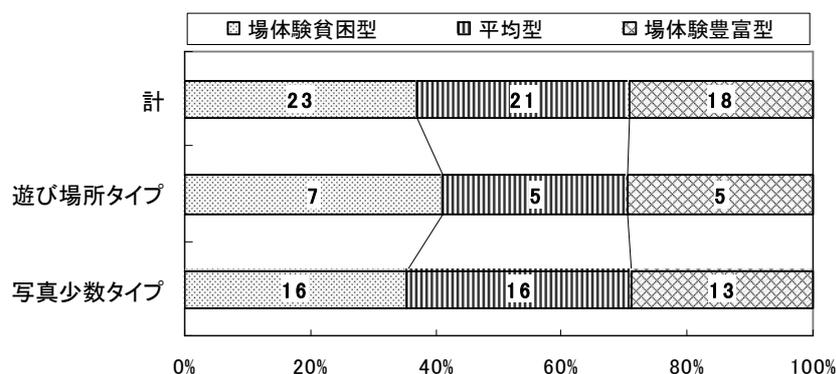


図 6-19 好きな道撮影タイプ×外遊び体験類型のクロス集計

表 6-23 好きな道撮影タイプ×外遊び体験類型のカイ自乗検定

	値	自由度	漸近有意確率 (両側)
Pearson のカイ2乗	6.42	6	37.81%

図 6-19 より、遊び場所タイプにおいて場体験貧困型の割合が多い。
このことから、場体験が貧困な子どもは遊び場所に魅力を感じる人が多いと言える。
なお、表 6-23 より漸近有意確率が 37.81%であるため、有意水準 5%のとき統計的に有意であるとは言えない。

(2) 学校別

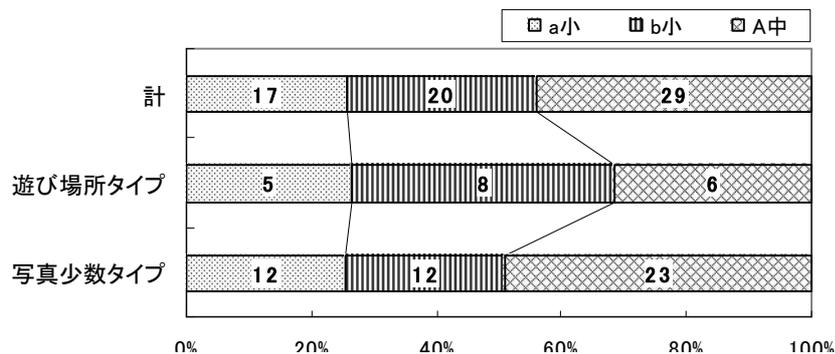


図 6-20 好きな道撮影タイプ×学校別のクロス集計

表 6-24 好きな道撮影タイプ×学校別のカイ自乗検定

	値	自由度	漸近有意確率 (両側)
Pearson のカイ ² 乗	2.16	2	34.00%

図 6-20 より、遊び場所タイプにおいて b 小の割合が多い。

このことから、b 小のような市街地の小学校に通う子どもは遊び場所に魅力を感じる人が多いと言える。

なお、表 6-24 より漸近有意確率が 34.00%であるため、有意水準 5%のとき統計的に有意であるとは言えない。

(3) 男女別

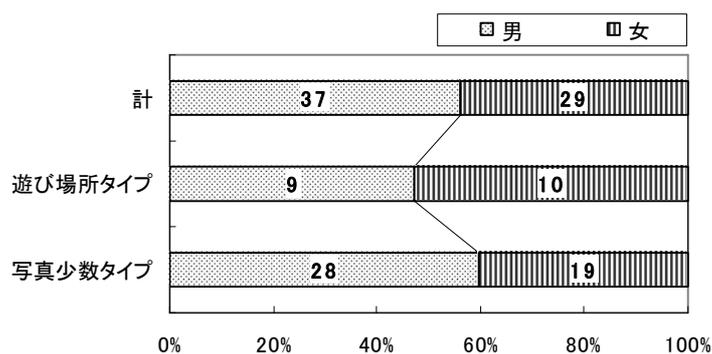


図 6-21 好きな道撮影タイプ×男女別のクロス集計

表 6-25 好きな道撮影タイプ×男女別のカイ自乗検定

	値	自由度	漸近有意確率 (両側)
Pearson のカイ ² 乗	0.82	1	36.57%

図 6-21 より、遊び場所タイプにおいて女の割合が多い。

このことから、女性は遊び場所に魅力を感じる人が多いと言える。

なお、表 6-25 より漸近有意確率が 36.57%であるため、有意水準 5%のとき統計的に有意であるとは言えない。

(4) 通学距離分類

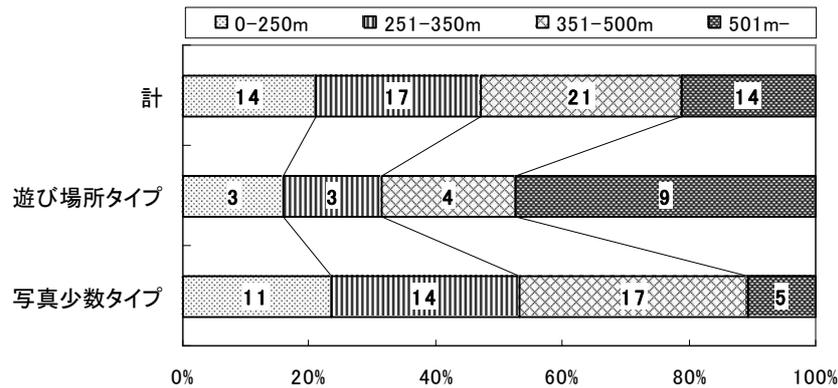


図 6-22 好きな道撮影タイプ×通学距離分類のクロス集計

表 6-26 好きな道撮影タイプ×通学距離分類のカイ自乗検定

	値	自由度	漸近有意確率 (両側)
Pearson のカイ乗	10.98	3	1.19%

図 6-22 より、遊び場所タイプにおいて通学距離が長いサンプルの割合が多い。

このことから、通学距離の長い子どもは遊び場所に魅力を感じる人が多いと言える。しかし、通学距離が短いと写真枚数が少なくなるためとも考えられる。

なお、表 6-26 より漸近有意確率が 1.19%であるため、有意水準 5%のとき統計的に有意である。

(5) 通学人数分類

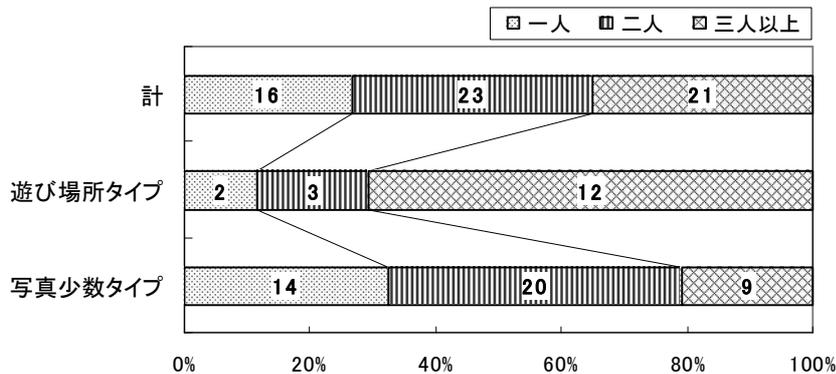


図 6-23 好きな道撮影タイプ×通学人数分類のクロス集計

表 6-27 好きな道撮影タイプ×通学人数分類のカイ自乗検定

	値	自由度	漸近有意確率 (両側)
Pearson のカイ2乗	13.21	2	0.14%

図 6-23 より、遊び場所タイプにおいて通学人数が三人以上のサンプルの割合が多く、通学人数が一人や二人の割合が少ない。

このことから、通学人数が多い子どもほど遊び場所に魅力を感じる人が多いと言える。

なお、表 6-27 より漸近有意確率が 0.14%であるため、有意水準 1%のとき統計的に有意である。

(6) 通学手段分類

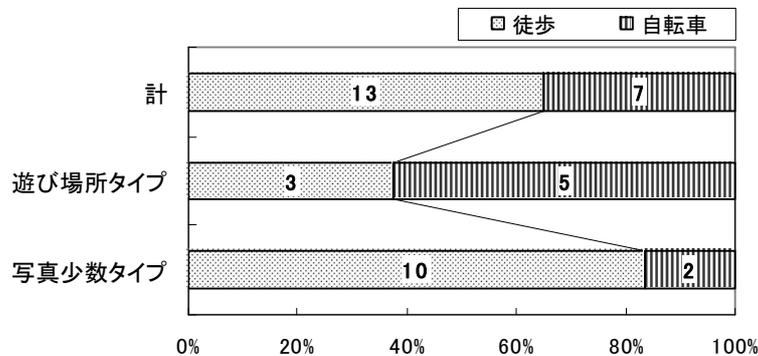


図 6-24 好きな道撮影タイプ×通学手段分類のクロス集計

表 6-28 好きな道撮影タイプ×通学手段分類のカイ自乗検定

	値	自由度	漸近有意確率 (両側)
Pearson のカイ2乗	4.43	1	3.53%

図 6-24 より、遊び場所タイプにおいて自転車の割合が多い。

このことから、自転車で通学する中学生は遊び場所に魅力を感じる人が多いと言える。しかし、自転車通学の中学生は通学距離が長いため、その影響があると考えられる。

なお、表 6-28 より漸近有意確率が 3.53%であるため、有意水準 5%のとき統計的に有意である。

6-3 まとめ

本章では第五章で得られた類型や第四章で得られた分類を用いてクロス集計を行い分析した。本章で得られた結果を以下にまとめる。なお、統計的に有意であったもののみを取り上げる。

外遊び体験と危険性認識との関係についての結果を以下にまとめる。

- 外遊びにおいて場体験が貧困な子どもは、突発的な危険を認知することが難しく、遠方からでも確認できる車の危険や継続的な危険を認知していることが多い。
- その他の危険に関しては、外遊び体験とは関係なく認知されると言える。

本章で得られた通学行動と危険性認識との関係について以下にまとめる。

- b 小のような市街地の小学校では、その他の危険を多く認知している子どもが多い。
- 中学生は突発的危険やその他の危険はあまり認知していない。
- 自転車通学する中学生は車の危険を遠方で認知したり、その他の危険を認知したりすることが多い。
- 徒歩で通学する中学生は継続的な危険を認知したり、車の危険を遠方で認知したりすることが多い。

本章で得られた通学行動と好きな場所の認識との関係について以下にまとめる。

- a 小のような郊外の小学校では景色や遊び場所に魅力を感じる人が多い。
- b 小のような市街地の小学校では特定の物に対して魅力を感じている。
- A 中のような城下町の特徴を残す町並みでは遊び場所や景色に魅力を感じる人が多い。
- 通学距離が短いと特定の人工物に魅力を感じるが多く、好きな場所の数が少なくなるが、通学距離が長いと景色や遊び場所に魅力を感じる人が多い。
- 通学人数が多い子どもほど遊び場所に魅力を感じる人が多い。
- 自転車通学の中学生は遊び場所に魅力を感じる人が多い。